安楽寺寺報

聞光

第６４号
歓喜会号
２０１２/８/１

発行所
〒７３７－００５４
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

仏の声を聞く道

信楽峻麿

仏教の経典によりますと、この世を超えたところの仏を、私たちに伝えるためには、それを姿形として、すなわち仏像として象徴表現するか、またはそれを言語として、すなわち名号として象徴表現するかの、二種の方法をもって明らかにされております。

そこでその仏を仏像として表した場合には、それに出遇うためには「見る」こと、「見仏の道」が語られ、その仏を名号として表した場合には、それを信心体験とするためには「聞く」こと、「聞名の道」が説かれることとなります。

そこで阿弥陀仏とは、もっぱら言語、名号として教説されておりますから、阿弥陀仏に出遇うためには、ひとえに聞くという道を歩むことが大切です。『無量寿経』によりますと、その四十八願の中の十三願文には、「聞名」のことが明かされております。聞名ということが、いかに重要なことであるかが知れましょう。

そしてまた、その『無量寿経』の第十八願成就文においては、私たちが浄土に生まれて仏になっていく道について、

その名号を聞いて信心歓喜せよ。

と説かれております。私たちは、その阿弥陀仏の、私に対する告名（なのり）、私に向かう招喚（まねき）の声としての、仏の名号を聞けよ、ということであります。

龍樹菩薩

ところで、経典では、その阿弥陀仏の名号、名声を聞くための手段については、詳しくは説かれておりません。そこでインドの龍樹が、新しく凡夫のための成仏道を明かすについて、この阿弥陀仏の聞名の道に注目し、それを採用して、仏の声を聞くためには、その日々において、礼拝（身）と称名（口）と憶念（意）の三業を修めるべきだと主張いたしました。いわゆるもっとも易しい仏道としての、易行道の開顕です。これならいかなる人でも容易に歩める仏道です。

親鸞は若いころ比叡山において、出家の仏教として天台宗を学んでおりましたが、当時の多くの民衆が、社会的な不安の中で、きびしい苦悩の日々を過ごしているのを見て、この人々にこそ、易しい仏法を伝えて、まことの人生の仕合わせを与えたいと思いました。そこで色々と探ねた末に、この『無量寿経』と龍樹の教えである、聞名の道に出遇い、この道こそが、あらゆる人々が心の安らいをうることのできる、まことの仏法であると確信し、この新しい易行なる聞名の道を、語り伝えていくこととなりました。

いま私たちが学んでいる、浄土真宗の仏道とは、このように親鸞によって発掘され、教示されたところの、阿弥陀仏の名号を聞くという「聞名の道」であります。かくしてその道とは、私たちが、その日々において、仏壇を大切にしつつ、それを中心として、礼拝し、称名念仏し、憶念して生きていくならば、やがてその私から仏への私の称名が、そのまま逆転して、それは仏から私への仏の称名であると、深く思い当たり、そのように味識されるようになってきます。そういう境地を、そのまま信心と言うわけです。

かくして真宗の仏道とは、称名、聞名、信心の道をいいうるわけです。浅原才市が、「才市よい。いま念仏したは誰か。へ。才市であります。そうではあるまい。弥陀の直説」とうたったとおりです。南無阿弥陀仏。

岡山浄福寺（精進料理）バスツアー

安楽寺では、下記の通り岡山高梁の浄福寺への参拝バスツアーを計画いたしました。浄福寺はいつも安楽寺へお越し下さいます、山下義円先生のお寺ですが、そこで精進料理をいただくという企画です。バス一台で皆さんとご一緒に参拝できればと思います。是非、ご参加下さい。

1、日時　平成24年10月30日（火）
2、日程　呉出発（7:40）→浄福寺参拝（11:00）
　→倉敷美館地区散策（大原美術館等・自由行動）（14:00）→呉到着（18:00）
3、参加費　1万円（精進料理、お供え等込み）
4、定員　40名（定員になり次第締め切ります）
5、〆切　10月10日（水）
6、申込　安楽寺まで直接お申込下さい。
（問合せ21-7561）

第63回聖典講座

日時　9月9日（日）13:00～
会場　ひかり幼稚園２階ホール
講師　信楽峻麿安楽寺前住職
会費　１０００円
講題　親鸞聖人のお手紙に聞く（その15）
―自力の心と他力の心―

安楽寺法要案内

九月	彼岸会	信楽美代子前坊守一周忌法要 日時　９月２３日（日）朝・昼 講師　信楽峻麿前住職
十月	永代経	日時　１０月１３日（土）朝・昼 講師　川尻 真光寺 寺西龍象師 テーマ　「救われると言うことは‥」
十一月	報恩講	日時　１１月１７日（土）朝・昼 １８日（日）朝・昼 講師　信楽峻麿前住職 テーマ　「なぜ浄土真宗なのでしょうか」
十二月	成道会	日時　１２月１５日（土）朝・昼 講師　佐伯　正覚寺　瀧渕良孝師 テーマ　「浄土とは」

安楽寺マンガ通信

その１６　信楽めぐみ作

聞思　止まって観る

信楽晃仁

六月初め二泊三日で仏教伝道教会の研修会に参加してきました。前住職が理事長を務めていた組織ですが、世界中のホテルに仏教聖典をおいて、仏教を広めている団体です。もともと、志和の浄蓮寺というお寺から出られた、沼田恵範という方が事業を興され「ミツトヨ」という会社を作られました。その会社を経営しながら、世界中にこの仏教の教えを伝えるために何ができるかということから、この仏教伝道協会を立ち上げられたようです。創立者は浄土真宗のお寺の出身ですが、仏教伝道協会は超宗派で、仏教各宗が一緒になって活動しています。毎年その各宗派が持ち回りで研修会を行っていますが、今回は九年ぶりの比叡山で天台宗担当での研修会でした。比叡山での研修は九年前にも一度参加させていただきましたが、親鸞聖人が二十年間おられたところという事で、思い入れがあり、また親鸞聖人もされたと思われる行を体験できるということから、わくわくしながら参加してきました。今回は六十名弱の参加で、タイからも三名の参加がありました。浄土真宗からは七名の参加者でした。びっくりしたのは浄土真宗の僧侶だけ髪の毛があり、他の宗派はすべて坊主頭です。当たり前のことですが、これだけそろうと肩身が狭かったです。他の浄土真宗の僧侶が、京都駅に迎えにきたバスに乗り込んだ時、坊さんがいっぱいて、びびったと言って笑わせていました。

今回の研修は行よりも、葬儀についての話し合いが中心でした。「葬式仏教の行方」という現在の仏教界がもっている危機感を話し合い、どう対応していくかという議題でした。イオンというスーパーが葬儀を商品として売り出して、葬儀の価格破壊をしてきたことによる、僧侶の危機感や、直葬が広がることにより、葬儀に僧侶が呼ばれなくなること等の危機意識等が話の中心になりました。私たちの班は「道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし」という伝教大師の言葉をひいて、衣食住を第一に求める僧侶には未来はないかも知れないけれども、私たちはどれほど道心を求め、道心を持って人々に接することができるか、ということにつきるという結論となりました。問題は私たちであり、衣食住は後から付いてくるものだという言うことでした。

この度も回峰行や座禅、そして生活全てが修行と言われ、食事もお風呂も清掃も何もかも作法にのっとっての生活でしたが、その中、講義や座禅で事あるごとに出てきた言葉が「止観」ということでした。これが天台教学の中心であり親鸞聖人も比叡山で学ばれたものです。この言葉、私が学生の時によく講義の中で出ていたことをふと思い出しました。まじめな学生ではなかったので、そんなに聞いてはいなかったと思いますが、耳の底に残っていました。またそれと同時に思いおこされたのは「止観」は「シャマタ・ビバシャナ」という原語だということを何度も先生が講義されていたことを合わせて思い出しました。

精進料理

久しぶりになんだかうれしくなって帰って辞書を引いてみましたが、やはり辞書では難解でわかりませんでした。しかし今回身にかけることで私なりに解釈できましたのはその「止観」とは、その言葉通り「止まって観る」ということだと思うのです。「止は定に通じ、観は慧に通ず」といわれ、心をしずめることによって、智慧が開かれることだそうですが、簡単に言えば「止まれば本当が観える」という事だと思います。車でもそうですが、スピードが出れば出るほど、視野は狭くなります。止まれば広くなる。同じことだと思います。当たり前のことなんですが、その当たり前のことができていないのが私たちの日常です。

食事の作法一つとってもそうです。比叡山での食事には大変たくさんの作法があります。食事をとるにもそれまでにしなくてはならないことがたくさんあり、やっと食事になっても、音を立ててはいけない。しゃべることなんてもってのほか、その上早く食べなさい、なのです。今教育の場では、「食事は家族の団らん。みんなが楽しく会話をしながら、ゆっくり食事をしましょう」と、ある意味では会話を強制します。そこには会話が主なのか、食事が主なのかがわからなくなっています。これが私たちの止まれない現実だと思います。ご飯が出てくると多くの場合、すぐに食べ始めます。「いただきます」でも言えれば、少し止まることができます。しかし現実は止まることなく流されて、食事なのか餌なのかわからなくなっています。比叡山での食前の言葉の一節には「仏祖の加護と衆生の恩恵によって、この清き食を受く、つつしんで食の来由をたずねて、味の濃淡を問わず、その功徳を念じて品の多少をえらばじ」とあります。本当にそうです。多くの命、多くの方々のおかげ、様々な縁が整う中で、今この食事をいただくことができ、そしてこの食事は私の命を支えているのです。もったいないことであり、それに気づかずに頂いていることはとても罪なことです。

回峰行（早朝）

その毎日を流される私たちに、仏教は様々に止まって観るための作法を伝えています。日々の生活の中のお念仏、これもふと立ち止まらせて下さいます。今まで見えなかったものが見えてきます。

命の教育は学校の教育現場にあるのではなく、日常にあるのです。現にここにある命とのふれあいを活かさずして、どうして命が伝わるでしょうか。私たちは命のあり方を、止まって観てみる、そんな作業が必要なのではないかと思いました。

仏事のイロハ

永代経とは

故人の遺志を受け聞法に励む

お寺にお参りされている方であれば「永代経」という言葉は、よく知っておられるでしょうが、最近では「永代経ってどんなお経ですか」と、お経の一つだと思っている方もいるようです。永代経とは、永代読経の略で、末長く（永代に）お経が読まれるという意味です。そこからまた「お寺が存続し、み教えが繁盛し続けるように」という願いが込められた意味にもなります。つまり①お寺が護持されること②そこで子や孫が代々にわたってみ教えを聞き慶ぶこと―この二つが「永代経」の心だと言ってよいでしょう。

そうした願いと志をもって、ある程度のまとまったお金や、仏具などをお寺に納めるのが「永代経懇志」であり、その報恩の行為を受けて、お寺が開く法要が「永代経法要」であるわけです。

したがって、「永代経を上げる」という場合の永代経は「永代経懇志」のことですし、「永代経が勤まる」といえば「永代経法要」をさしています。

また懇志については、故人への追慕から納められる場合がほとんどで、表書きには「永代経志」などの文字の右肩に、故人の法名を記したりします。これは故人のために納めるというのではなく、故人の「永代にみ教えが伝わるように」との遺志を受けた施主が、故人になり代わって納めるからです。くれぐれも「故人への追善供養」と誤解しないで下さい。